水 文・ 水 資 源 学 会 誌
J. Japan Soc. Hydrol. and Water Resour.
Vol. 37, No.1, Feb. 2024 pp. 7 - 10

学会賞受賞記念寄稿

功績賞を拝受して

河村　明*

この度は，令和5年度水文・水資源学会の特に「功績賞」という大変栄誉ある賞を頂き，びっくりしておりまた望外の喜びであります．ご推薦下さった（恐らく総務委員会の）方々そして関係の皆様方に心より御礼申し上げます．調べてみますと，昨年度までに功績賞を受賞された方は21名おられ，うち12名は本学会の会長を務められており，それ以外の皆様におかれましても他学会や国際学会の会長を務められた方々などそうそうたる面々となっております．本学会の功績賞は, 1994年度から昨年度までの29年間のうち11年は該当者なしという高いハードルであり，該当者ありの場合でも各年の功績賞受賞者は大体1名で, 2名の年が3年ありました．その中で何故私が？と思っておりましたら，今年度の功績賞は大盤振舞い？で3名受賞ということで，お陰様で私も大変栄誉ある功績賞を拝受することができ，そのような英断をされた理事会や関係の皆様には再度御礼申し上げます．

私の水文・水資源学会における功績は？と考え，私のこれまでの本学会との関わりで少しは貢献できたかもと勝手に思っている事を幾つか紹介させて頂き会員の皆様への感謝とさせて頂きます．まず，基本情報として，私は水文・水資源学会が設立された1988年3月12日時点で本学会の会員となっており, 1994年の第4期より編集委員として本学会委員会に参画し，その後第7期, 8期では編集委員の西日本グループ長を務めました．その間第6期で企画事業委員，そして第7, 8, 9期で国際委員を務めました．

水文・水資源学会は, 2000年4月（第6期岡田憲夫国際委員長時）に韓国水資源学会と国際委員会レベルの学術交流協定を締結し，さらに私の恩師である神野健二先生（2020年12月30日73歳で逝去される）が第7期国際委員長時の2001年2月にこれを学会間レベルの相互交流協定として締結しましたが，この学会間レベルの相互交流協定締結に当たり，当時の国際委員団4名（九州大学から神野委員長，大槻委員と私，京都大学から中北委員）は2000年11月にソウルの韓国水資源学会を訪問し，日韓国際委員会合同会議で相互交流協定締結を協議し本協定締結に至りました（神野, 2013）．そして相互交流協定締結以降の2001年～2004年の韓国水資源学会研究集会に4回，私も神野先生と共に参加・研究発表を行い，また，定期の研究集会とは別に，2001年11月には日韓水文セミナーを福岡市にて開催し，現在も続く交流の最初の体制を構築したと思います．

さて，国際委員などとして韓国水資源学会研究集会に参加しますと，大変な歓待を受け特に夜の懇親会などにおいて日本からの参加者を大いに接待して下さいました．そうすると今度は，韓国から日本の水文・水資源学会研究集会に一団が参加されたときにはそれ相応の対応をしなければなりません．学会による公式懇親会以外の接待？などでは，実は国際委員や大会実行委員らが自腹で対応していました．例えば, 2002年の岩手大学での水文・水資源学会研究集会では，国際委員長の神野先生や国際委員ら（私も含む）が，そして第8期2003年の福岡での水文・水資源学会研究集会では，神野先生が実行委員長を務め私も大会実行委員でしたが，韓国水資源学会一行の接待？は対応した委員の自腹で行いました（なお，その分以上に韓国では接待されていると思います）．そこで，そのような各委員が接待のため自腹を切ることのないようにと，福岡大会に

* 東京都立大学 名誉教授

よる余剰金の一部60万円を，学会の特別会計として拠出し「日韓交流事業基金」を創設しました．そして，これを特別会計としたことで，後述する2004年8月の（財）日本学会事務センター破産の時にも没収されることなく本基金は存続されました．

私が当学会に最も貢献できたと思われるのは，私が第9期（2004年8月～2006年8月）の編集出版委員長を仰せつかった時だと思います．この間，私の全仕事量の中で本編集出版に関する仕事に最も多くの時間を費やしました（河村, 2006）．事の始まりは，出版編集委員長就任（8月20日）直前で，個人的には10月から九州大学から東京都立大学への異動前という絶妙？のタイミングで，当学会の事務業務を担当していた（財）日本学会事務センターが破産する（8月17日に破産宣告される）という寝耳に水の事態が発生しました（池淵, 2004）．そのため当学会でも多大な損失を被りましたが，私の最初の仕事は，その損失の一部を取り戻せるという科学研究費補助金（特別出版助成）への申請書作成でした．就任直後で編集出版の状況がほとんど分からない状況で, 9月末の東京への引っ越し前の丸1週間を申請書作成に費やしました（お陰様で後日340万円が交付されました（鈴木, 2005））．次いで，当学会の事務業務を担当する国際文献社が決定する2005年3月までのほぼ半年間（池淵, 2005），編集出版に関わる業務を私が代行しました．そして，編集出版の事務業務の引継ぎが終わると，今度は学会誌制作経費を削減すべく制作会社の見直しが理事会で承認され，総務委員長，財務委員長と共にその選定作業に取りかかりました．数社からの入札の結果，現在の（株）大應を選定し, 2006年の第19巻1号より現在まで本学会誌の制作・印刷をお願いしています．それまで本学会誌の第3巻1号（通巻4号）から18巻6号までほぼ16年間にわたり本誌制作を担当していただいた（株）信山社サイテック（後，学報社）には，私が編集出版委員を仰せつかった第4期当初より種々アドバイスを頂戴し大変お世話になりました（河村, 2005）．ここに記して御礼申し上げます．

私が編集出版委員長の間に国際誌に関する大きな変革も行いました．それまで編集出版委員会の国際誌担当幹事がHydrological Processes Japanese Special Issue（HP-JSI）を担当していましたが，それを，国際誌小委員会を発足させ小委員会の担当としました（編集出版委員会, 2005）．さらにその後，HP-JSIと平行して独自国際誌（現在のHydrological Research Letters）を創刊すべく国際誌編集委員への昇格が認められました（国際誌編集委員会, 2006）．私も国際誌小委員会の発足時そしてその後の国際誌委員会ではアドバイザーとして本件には深く関わりましたが，（ここでは割愛させていただきますが）当初は相当すったもんだがありました．また，その独自国際誌である新オンラインレター誌の雑誌名と表紙デザインが公募されましたが（山敷・中江川, 2006），その雑誌名に関して，私の不名誉な？貢献があります．実は, 12の雑誌名の応募の中から私の提案した「SUISUI」と当時足利工業大学の横尾氏の「Hydrological Research Letters」が 採用され,「SUISUI Hydrological Research Letters」とその新オンラインレター誌は命名されました（国際誌編集委員会, 2007a; 2007b）．しかし，結局「SUISUI」の部分は国際誌名としては相応しくないと言うことで削除されることとなり，私の「SUISUI」は1年足らずの短命に終わりました（安成・国際誌編集委員会, 2008）．

私が編集出版委員長の次に当学会に貢献できたと思われるのは，私が第13期（20012年9月～2014年9月）の総務委員長を仰せつかった時だと思います．私が総務委員長就任の2012年9月の総会で，任意団体としての水文・水資源学会の会員および資産を一般社団法人としての水文・水資源学会へ移行する決議がなされました．水文・水資源学会の法人化の方向性は第11期の砂田健吾会長を中心に検討され，第12期椎葉充晴会長就任時の2010年9月の総会で，これまでの任意団体から一般社団法人に移行するという基本方針が承認されていました（椎葉, 2011；水文・水資源学会理事会, 2011）．これを受けて，第12期の総務委員長で且つ新たに設置された法人化特別小委員会の委員長でもある窪田順平先生を中心に一般社団法人としての定款・細則が作成され，それらは第12期の2011年度の総会で移行手順などとともに承認されました（水文・水資源学会理事会, 2011）．それに伴い第13期の役員（理事，監事）は法人正会員による選挙により選出されることになりました．まず，役員候補者推薦委員会が設置され（水文・水資源学会理事会, 2012），それにより推薦された役員候補者が，第13期役員候補者となるとともに，設立会員として一般社団法人水文・水資源学会の設立・登記が行われました（選挙管理委員会, 2012a; 2012b；総務委員会報告, 2012）．

実は私は第12期の理事を仰せつかっており，上記の法人化への移行を理事会で報告を受け審議をしておりましたが，第13期の総務委員長を拝命することになったため, 2012年8月6日に行われた一般社団法人水文・

水資源学会の設立総会において議事録署名人として任命され，そして同日引き続き行われた第13期第1回理事会から法人としての理事会の運営に深く関わってきました．現在，学会ホームページにもアップされている一般社団法人水文・水資源学会定款において，設立時代表社員5名の筆頭として（単にあいうえお順のためです）名前が残っていますが，法人化移行にそれ程深く関わっていない私にとりましては誠に恐縮しております．当然これは，法人化移行に関わる一切をほぼ一手に引き受けられた第12期の窪田順平総務委員長兼法人化特別小委員会委員長の並々ならぬご尽力の賜物であり，また第13期では副会長および総務委員会アドバイザーとして，さらに実は，私が第9期の編集出版委員長の時の財務委員長でもあり，前述の（財）日本学会事務センターの破産問題にも一緒に取り組み様々な的確なご助言を賜りました．大変残念でならないのは窪田順平先生は2021年5月63歳という若さで逝去されたことです（大手, 2021）．先生には令和4年度水文・水資源学会特別功労賞が授与されましたが（山崎, 2022），衷心より哀悼の意を表しますとともにこれまでの本学会へのご貢献誠に感謝申し上げます．

最後に，私が学会にかなり貢献できたと（勝手に）思いますのは, 2023年度総会研究発表会を長崎で開催できたことです．といいますのも，実は，この大会実行委員長を引き受けてくれました長崎大学の中川啓先生は，恐らく私が第9期編集出版委員長最後の？仕事として，西日本グループの次期（第10期）編集出版委員として当時鹿児島大学の彼を無理矢理？本学会に引きずり込んだことです．中川先生は，九州大学では私と同じ研究室の後輩で頼みやすく，上述しました神野先生（地下水の大家）の愛弟子でもあり，本学会では意外と少ない地下水に関する研究（地下水汚染や地下水流動など）を精力的に行っています．中川先生には学会誌2012年第25巻第2号の担当も引き受けていただき（中川, 2012），そして，私が第13期総務委員長最後の？仕事として，次期第14期（2014年9月～2016年9月）の研究調整委員長をまたもや無理矢理？引き受けてもらいました．それ以後本学会の運営にも深く関わっていただき, 2023年度の長崎大会が実現したものと思います．

以上，書き始めると思いのほか長くなり誠に恐縮です．末筆ながら，私も水文・水資源学会には愛着が大いにあり，今後も年次大会の懇親会だけには参加させていただこうと思っておりますので，会員の皆様には今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます．この度は誠にありがとうございました．

引用文献

編集出版委員会 2005．編集出版委員会，国際誌小委委員会の発足について．水文・水資源学会誌 18（2）；211.

池淵周一 2004．急告．水文・水資源学会誌 17(5)；前付.

池淵周一 2005．会告．水文・水資源学会誌 18(2)；前付.

神野健二 2013．国際賞を受賞して．水文・水資源学会誌 26(1)；21-23.

河村 明 2005．編集後記．水文・水資源学会誌 18(6)；738.

河村 明 2006．第9期編集出版委員長を退任するにあたって．水文・水資源学会誌 19(5)；431.

国際誌編集委員会 2006．新オンラインレター誌創刊の趣旨．水文・水資源学会誌 19(6)；524-526.

国際誌編集委員会 2007a．水文・水資源学会新オンラインレター誌について．水文・水資源学会誌 20(1)；60.

国際誌編集委員会 2007b．SUISUI Hydrological Research Letters投稿受付開始のお知らせ．水文・水資源学会誌 20(2)；130-131.

大手信人 2021．順平さんのこと．水文・水資源学会誌 34(6)；407-409.

中川 啓 2012．編集後記．水文・水資源学会誌 25(2)；135.

選挙管理委員会 2012a．第13期役員候補者選挙の実施について．水文・水資源学会誌 25(3)；前付.

選挙管理委員会 2012b．第13期役員候補者選挙の結果について．水文・水資源学会誌 25(4)；262.

椎葉充晴 2011．巻頭言-水文・水資源学会の法人化．水文・水資源学会誌 24(1)；1-2.

総務委員会報告 2012．一般社団法人水文・水資源学会設立総会議事録．水文・水資源学会誌25(5)；337.

水文・水資源学会理事会 2011．一般社団法人水文・水資源学会の移行に向けて．水文・水資源学会誌 24(6)；392-393.

水文・水資源学会理事会 2012．第13期役員候補者選挙の実施について．水文・水資源学会誌 25(2)；前付.
鈴木雅一 2005．水文・水資源学会2005年度総会報告．水文・水資源学会誌 18(6)；711-713.
山敷庸亮・仲江川敏之 2006．水文・水資源学会新オンラインレター誌の雑誌名と表紙デザインの公募．水文・水資源学会誌 19(6)；527.
山崎 剛 2022．令和4年度水文・水資源学会表彰について．水文・水資源学会誌 35(6)；424-426.
安成哲三・国際誌編集委員会 2008．オンラインレター誌正式名称変更のおしらせ．水文・水資源学会誌 21(1)；82.

略歴

1978年3月　熊本大学工学部環境建設工学科土木コース卒業
1980年3月　九州大学大学院工学研究科水工土木学専攻修士課程修了
1985年3月　九州大学大学院工学研究科水工土木学専攻博士後期課程単位取得退学
1985年4月　九州大学 工学部 助手，同11月工学博士の学位授与（九州大学）
1993年6月　九州大学 工学部 助教授
2004年10月　東京都立大学 大学院工学研究科 教授
2021年4月　東京都立大学 名誉教授
この間水文・水資源学会で：
1988年　入会（この年の12月に学会誌1巻1号発行される）
2004年　第9期 編集出版委員長
2012年　第13期 総務委員長
2014年　第14期 副会長，総会・研究発表会企画小委員会委員長
2015年　総会・研究発表会実行委員長
2016年　第15期 監事
2018年　第16期 監事
2021年 「学術賞」受賞